



パークレー 1年目の秋(右端が筆者)

集まる大学に近づけるための仕事があった、
そのような思いが成長していった。

そして二〇〇一年、私は同志社大学にビジネススクールを開設する準備活動に参加した。暗中模索のなかで、一番の助けは、パークレーで得られた世界に広がる研究者のネットワークであった。米国のビジネススクールの教育を、日本の環境に適合させる試みは、多くの人々の助けを受け、二〇〇四年に西日本では初めての専門職大学院として結実した。また、時期を同じくして、日本の大学に世界的研究拠点を構築するとの目標のもと、二十一

世紀COE (Center of Excellence)プログラムを文科省が開始したため、学際的、かつグローバルな研究者集団による、日本企業の国際競争力研究を提案したところ、それがCOEの事業として採択された。

さらには、京都の有力企業であるオムロンから、「創業者立石一真氏のイノベーション活動への思いを後世に伝えてほしい」と多額の寄付をいただき、これら公私のサポートを得て、二〇〇三年に技術・企業・国際競争力研究センターを同志社大学内に開設することができた。翌年に開校した、イノベーション研究の博士学位授与プログラムである、TIM (技術・革新的経営) 専攻とあいまって、夢に描いていた組織体がここに実現できた。

人との組織の研究

日本における人と組織の関係、それが私の研究テーマである。二十一世紀に入り前述のような大学改革にかかわるなかで対象がよりフォーカスされ、ここ数年は専門職、例えば技術者、医師等と組織の関係に関する研究を進めている。私の研究が、彼らプロフェSSIONナルの高い勤労意欲と能力が遺憾なく発揮できる環境をつくるために少しでも貢献できればと願っている。

もう一つは、事業の承継研究である。京都

は歴史と文化の町であるが、この町を支える産業にも長い歴史が存在する。仏具や仏典、あるいはそれらに必要な金箔等の素材生産、さらには京料理や京菓子、伏見の酒や宇治のお茶。これらを生産するのは、その大半が桃山、江戸時代より続く老舗である。幾多の社会変化を乗り越え、人々の嗜好の変化にも対応し、数百年そののれんを守り続けてきた。変化のなかで遅くも存続する秘訣を、彼らの事業マネジメントから見いだすため、その承継の経験を数年前から聞き取ってきた。その研究から人の輪が広がり、二〇一〇年五月には事業承継学会を京都で設立した。学会の門戸は大きく開かれ、オーナー経営者や会計士、弁護士等のプロフェSSIONナルが、学者とともに活発に活動している。

一九八一年にパークレーで始まった研究者としての私の経歴は、多くの研究者のそれとは少し異なる。人と組織の研究といえは聞こえは良いが、興味という羅針盤に導かれ、いろいろな社会現象の研究とともに、研究教育組織の構築とそのマネジメントに時間の大半を振り向けてきた。そしてこの知的好奇心と社会的創造活動に対する性向は、二〇代のパークレーでの経験によってつくり出されたものである。ゆえに確信を持ってここに伝えたい。

若者よ、海を越え、彼の地で学べし。

(注) 試行的研究成果ではあるが、2009年に『高付加価値エンジニアが育つ：技術者の能力開発とキャリア形成』を日本評論社から刊行した。日本の電機産業に働く技術者の実態をこの本を通して知っていただければ幸いである

異文化との出会いが生んだ夢

同志社大学大学院総合政策科学研究科教授

中田喜文

なかた よしふみ

国際文化教育交流財団奨学生（一九八二年度）。八一年大阪大学大学院経済学研究科前期課程修了。八二―八六年米国カリフォルニア大学バークレー大学院経済学博士課程留学、修了。八六年アラバマ大学助教授、八八年より同志社大学専任講師、助教授を経て、現職。二〇〇二年より同志社マネジメントスクール長（〇四年ビジネススクールへ改名）、〇七年より技術・企業・国際競争力研究センター長。



一九八一年夏、カリフォルニア大学バークレー

一九八一年、バークレーは、すでに今日の日本のどの大学をも凌駕するグローバル化が進んでいた。博士課程に同期で入学した二〇名弱のうち、半数以上は留学生であった。アジアでは、日本、韓国、台湾、ヨーロッパからは、オランダ、ベルギー、そしてスペイン、南米からはブラジル、さらにドイツからの数名の一年間の交換留学生が加わり、教室のなかでも、週末のピクニックの場でも、学生たちの間で異文化の交流がほとんど意識することなく行われていた。

私が所属した経済学部博士課程では、ミクロ経済学、マクロ経済学それぞれが初年時の

秋学期、春学期と連続で履修が義務付けられ、計量経済学と米国経済史も、一年生の必修科目であった。二年目からは、各自の興味に依り、公共経済学、金融、国際経済、労働経済等の専門ごとに、やはり秋、春の二学期連続での当該専門科目を履修することが義務付けられていた。私は、一つの専門として労働経済学を選択したが、もう一つの専門は、教育学部が提供する教育の経済学を選択した。ほかにも、学部を超えた学びの場がそこには普通に存在しており、この経験は、その後の私の研究における学際的なアプローチの原体験となった。

米国から戻って

バークレーでの博士課程を修了し、米国内

●経団連国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。海外の大学・大学院に留学する日本人学生や日本に在籍する外国人留学生に対する奨学金の支給を通じて、わが国の学術研究や世界経済の発展に寄与するとともに、国際社会に貢献する人材を育成することを目的に活動している。

部のアラバマ大学で教え、一九八八年春からは同志社大学に着任した。カリフォルニアとアラバマは、直線距離で約五〇〇〇kmも離れ、気候風土のみならず、その発展の歴史の違いから、文化的にも大きく異なると米国では認識されている。しかし、私が所属した二つの経済学部の学風には、階層を感じさせない教員関係、新たな試みを評価する進取的な価値観等、米国の大学の共通文化ともいえるものが存在していた。

他方、古都京都の同志社は、設立者新島襄が、国禁を犯し出国し、当時新興国であった米国の学問の府ボストンで学び、設立した大学である。それゆえ、ある意味では日本の大学のなかでも最も米国の高等教育が掲げる価値や文化を体現する大学である。私は、同志社に赴任し、十数年が経ったところから、大学という組織のなかで自分が何をしたいかを考え始めた。そして、バークレーで感じた、そこで学ぶことの喜びと学べたことの幸運を感じることができる大学、世界に開かれ、世界から人が